
世界の話の三題噺

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の話の三題噺

【Nコード】

N7747R

【作者名】

なつき

【あらすじ】

三題噺を載せてゆきます。

茶色い血

お題：「早朝の部屋」「泣き出す」「ココア」

智哉があたしの部屋から出ていったとたん、あたしはココアを壁にぶつける。がちやあんと、漫画みたいな音が響いてとても滑稽。

ココアは面白いほど染みになる、白い壁に垂れて模様をつくってこれどこかで見たことあるって思ったらすうだ、いつだったか家族で行った美術館の絵に似ているんだ。わけわかんない展覧会だった、父の友人のなんちゃらっていう画家の人が絵を出してたんだけど、その人の絵はただ現実を切り取っただけで、馬鹿なんじゃないってあたしは言いたくなかった。現実を模写したって、そんなの意味ないじゃん。現実にないうつくしい景色を描くからこそ、美術には意味があるのだ！と、思いつつ見つけた絵が、一面に血をぶちまけたような、グロテスクでも魔力のある絵だった。あたしはそれに見惚れた。そう、それに似ているんだこの壁は。たらたらりと、せわしなくココアは垂れてゆく。重力って、面白い。

と、智哉が小さくドアを開けた。心配そうな、うかがうような表情をしている。やっぱり来た、八歳違いのあたしの可愛い弟。

「舞ちゃん、今、なにか割れた音がしたんだけど……」

この子は馬鹿か、そんなの見りゃわかるでしょ。と思ったけれど、優しいあたしはにつこりとして言っただけ。

「ああ、うん、割ったの」

「……僕の淹れたココア、まずかった？」

「そんなことないよお」

笑って、右手をひらひらと振る。こんなにもあたしは気さくにしているのに、この子ときたらいつつもあたしに怯えるんだ。いくら歳が十歳近く離れてるって言っただけ、まったくひどい話だ。

「そんなことないの。そうじゃなくて、なんかね、なんとなく投げ
てみたくなっただけ」

「……なんとなく？」

「そう、なんとなく。それだけ」

「なんとなくて、コップを割ることって有り得るの？」

「あるある、超ある」

現役女子高生っぽく言ってみたのに、智哉はにこりもしない。
やっぱりこの子、愛想がない。

智哉は上から下まで壁を見て、ぼそりと言う。

「とりあえず、拭くもの持ってくる。染みになったらいけないから」
言い終わるか言い終わらないかのうちに、智哉はくると背を向
けて、階段を下りていってしまった。

つまり、あたしは取り残された。

「……なによ」

ココアの染みは、心臓から滴る血みたいにぽたぽた落ちる。

「なによ」

あたしの声を、受け止める人はいない。

苛ついてきた。猛烈に、苛ついてきた。あたしはコップの破片を
拾い、手当たり次第壁に投げつける。がちゃんがちゃんと、
破壊音の連鎖。

「なによなによなによなによ！」

慌てる足音がして、智哉が階段を駆け上ってくるのがわかった。

あたしよりも背丈の小さな弟は、暴れるあたしを止めようとする。

「舞ちゃん、落ち着いて。落ち着いて！ どうしたの、まずは深呼吸

吸してよ、整理して話してよ！」

「るっさいなあ！」

あたしは智哉の腕を払う。智哉は床に、倒れ込む。

智哉を見下ろし、あたしは晒う。

「あんたって優等生ね。こんなときまで、見事なまでに優等生。い
い子ね智くんって、そう言われてるもんね。いつだって、どこでだ

って。はっ、これだから優等生は違うわ。あたしとは違うよねー。
これだからいいよね、期待の神童ちゃんは」

智也は暗い光を込めた瞳で、あたしを見上げ睨んでくる。ああこ
ういうところがどうしようもなく姉弟だ、どうしようもなくて、む
かつく。

「いや、違うよ」

智也は、しずかな声で言う。

「僕は神童じゃないよ。僕は、優等生のふりをするのが上手なだけ
だ。仮面をかぶることができるだけだ」

「すっごおい、神童の智くんは、小学生なのに仮面なんて言葉をつ
かつちゃうんだあー！　すごいすごい！」

「馬鹿にしないで、舞ちゃん」

その声は低く這っていて、あたしはすこしだけびっくりする。あ
れ、この子、こんな声出せたっけ。

「舞ちゃん、いい加減にしなよ。どうしてこんなことするの？　ね
え舞ちゃん、僕は心配しているんだ。舞ちゃんのために、」

「あたしのためとかそういう台詞なんてもう聞き飽きたのよ！」

あたしは金切り声で叫ぶ。頭を抱え、しゃがみ込む。

「舞ちゃんのため。舞花のため。佐藤さんのため……そんな言葉で
救われたことなんて、あたし一度もなかった！　みんなあたしを迫
害するのよっ、あたしはみんなのこと想ってるのにこんなにも想っ
てるのに想ってたのに、みんなはあたしのことなんにも考えてくれ
なくて！　もういい！　もういい！　もういいわよ！」

気がついたら、涙声になっていた。涙は栓を抜いたみたいに溢れ
出し、どろどろと頬を伝う。泣いているのだ。そう気づいた。

智哉はすでに立ち上がり、あたしを見下ろしている。憐れむよう
な表情。あたしはどうせ狂人みたいに見えるのだろう、そんなこと
ないのに。

「……あたしは狂ってなんかない。あたしはふつつ、あたしは正常
……」

「そつだよ」

智哉は、なぜだか苦しそうな声で言う。

「舞ちゃんは、狂ってなんかいない。舞ちゃんはふつつ、舞ちゃんは正常。だから……」

智哉はひとつ、息を吸った。そしてあたしをまっすぐ見つめて、言う。

「……元氣出してよ」

吐き出すように言って、あたしの部屋を出ていこうとした。智哉、とあたしは呼び止める。涙でぐちゃぐちゃであるう顔に、余裕たっぷりの笑顔をつくって。

「このココアのこと。智くんがやったことにしといてね」

智哉はすこしのあいだ黙っていたが、やがて頷き、今度こそ部屋を出ていった。

あたしはしばらく、しゃがみ込んでひざに顔をうずめたまま泣き続けた。涙って、いつかい溢れると止まらない。あたしは流れるままにさせておいた、どうせ涙なんて、身体から水分が出てゆくだけだ。それだけの、意味と価値しかない。

あたしは、いつものおまじないを、となえた。

「あたしはだれも愛さないし、あたしはだれにも愛されない」
顔を上げる。茶色い液体は、すっかりべたついてる。

愛なんて、存在しないのだ。すくなくとも、いま、ここには。

月を見えるということ

お題：「夕方のコンビニ」「ときめく」「月」

「あ、月」

コンビニを出たとき、神崎さんは夕方の空を小さな指先で指して、ぼつりと呟くように言った。空を見る習慣なぞまったくない俺は、は、と言って上を見上げる。

確かに、月があった。まだほとんどが水色の空に、ぽかりと浮かぶ白い月。

「上弦の月ですねえ」

俺は長年の勉強で得た知識を、さりげなく披露する。神崎さんは、月をじいつと見つめたまま言う。

「上弦の月って、聞いたことがあります。古典で教わった記憶が。弓に見立てて、月を表現しているんですよね？」

「ええ、その通りです。月は三十日周期で繰り返しますね、新月、三日月、上弦、満月、下弦、新月と。かたちが変わるわけですが、じっさいの月はひとつです。単に光の関係であるわけで」

「そのくらい知ってます」

一蹴されて、俺は苦笑いする。いやいや、ちょっと舐めてたか。

神崎さんは、ただ者ではない。俺よりひと学年下、というハンデすら、こうしてたやすく乗り越える。

なんとなく月を眺める雰囲気になっっているように思えたので、俺たちはコンビニの駐車場に留まる。しばらくは、なにも言わずにただひたすら空を見た。ときどきちらりとうかがう神崎さんの表情は、真剣そのものだ。俺は小さく息を吐いて、再び空に視線を戻す。

空ってそんなに、見ていて面白いものなのだろうか。俺にはわからない。空というのはただの自然現象、俺は空に対してその程度の

認識しかしていない。青か赤か黒しかないし、きれいなものだと思
ったこともない。しかし神崎さんは、食い入るように空を見ている。
そんな神崎さんを見ると、俺も空の素晴らしさを知ってみたい、
なんてらしくもないことを思ってしまうのだ。

すこし冷える。俺は指を動かしながら、言う。

「大丈夫ですか、神崎さん。寒くないですか」

「大丈夫です」

こっちを見もしねえ。俺は再び、苦笑する。この俺がこんなにな
いがしろにされるなんて、ふつうはないことなのだが。

空を見るのも飽きたので、神崎さんを眺める。強い意思をもって
結ばれた唇、まっすぐに天に突き刺した視線。やっぱり素敵だな、
としみじみ思う。神崎さんは、天使のように麗しい。どこまでも、
うつくしいのだ。

「……神崎さん。空というのは、いいものですか？」

「いいものです」

「たとえば、どういうところが？」

「たとえば、とか、説明を求めないところが」

神崎さんはさらりと言って、俺の顔を見た。端正な顔に、滲むよ
うな笑みが広がる。はかなくて、でも、とても愉しげな笑み。急な
ことで、俺は動揺してしまう。なんだこれ、なんでこんなにどぎま
ぎしてるんだ俺は。

「佐藤先輩。ありがとうございました。行きましょう」

言い終わるか言い終わらないかのうちに、神崎さんは歩き出して
いた。待つてください、と俺は神崎さんのあとを追う。

神崎さんの笑みが、頭にこびりついて離れない。

俺は小さく頭を振って、ああ駄目だ、と思った。俺は、きっと、
この人から逃れることができない。

白い月が、いつもよりも輝いて見えた。なんて、俺らしくもない
錯覚なのだろうけど。

隠した両手

お題：「夕方の並木道」「逃げる」「長袖」

夏だ。夕方になっても、まだまだ熱気のこもる夏。でもこんな時期でも、あたしは長袖の服しか着ない。手を露出させるのが、嫌なのだ。女の子なのに、ごつごつと無骨な手。

「それにしてもさあ、隠しすぎじゃない？」

隣を歩く美樹は、笑って言う。バスケット部のジャージ姿で、短く髪を刈り上げていて、それなのにやっぱり美樹はとても美人。背もすらりと高くって、小さなあたしは見上げてしまうほどだ。

「まどかの手はさ、ピアノがんばってたーって証拠なんだから。胸張っていいと思うよー、っていうかそうすべきだと思う！」

ねっ、と言つて、美樹はあたしの左手をとる。そしてそのまま、ぎゅうと握ってゆったりと振る。

「まどかは自信がなさすぎなんだよー」

「そうかな……」

「そうだよー。まどかはさ、ピアノ弾けるしお茶できるし絵も描けるんだし、もっと自信もつべきだって！ それに可愛いしさ！」

「かつ、可愛いなんて、そんなこと、ないよ……」

あたしは顔を赤らめる。左手の美樹のぬくもりを、変に意識してしまう。

恋、とかじゃないと思う。だってあたしも美樹も、女の子だし。でも、あたしにとって美樹の存在が大きいっていうのは紛れもない事実だ。小学校からいっしょで、おんなじ私立中学校を受験して、あたしも美樹も合格して、こうやって今も帰り道をいっしょに辿る仲。ほかに美術部の友達なんかはいるけれど、あたしは美樹がいちばんの友達だと思ってるし、美樹もきっとそうだって、祈るよう

に思ってる。

手をつないだまま、歩く。道の両がわに立つ木々は、風を受けてそよそよと揺れている。平和だ。ほんとに、平和。何回も何回も、美樹と歩いた風景。こんな日常が続けばいいな、って思う。やっと手に入れた、平穏な日常。

日は暮れてゆく。紅の輝きが、どんどん増してゆく。あたしは顔に微笑みすら浮かべている。

「あ、そうだまどか」

美樹がなにか思い出したように言って、あたしは美樹のほうを見る。美樹は前をまっすぐ見ている、穏やかな表情。

「あたしね、付き合うことになったんだ」

「……え？」

聞き間違いかと、思った。

「うん、バスケ部のさ、大山っているじゃん？ あいつとさ」

「……あ、うん」

動揺を、隠し切れなかった。付き合う？ あたしはそんな話、なんにも聞いてない。

そんなあたしに気づいているのかいないのか、美樹ははにかむようにして続ける。

「ぶっちゃけちゃうと、もともとさ、好きだったんだー、あたしもでもそんなこと言えないじゃん。でも大山も美樹のこと好きっぽいよ！ って部活の子たちが教えてくれてさ、うん、だから部活の子たちにお世話になって、めでたく！ みたいな感じでさ」

「あ、そうなんだ……」

動揺は、怒りに変わりつつあった。なんで。どうして。あたし、そんなの、知らなかった。部活の子たちは知ってたんだよね、なのにあたしは知らなかった。どういうこと、それって、どういうこと。

「おめでとうって、言ってくんないの？」

美樹はいたずらっぽく言う。

そのときの美樹の顔、それであたしはわかってしまった、美樹は今、あたしを見ていないんだと。美樹の瞳にうつっているのは、きつと大山くん。あたしに話しているようで話していない、美樹は、彼氏ができたって状況に酔っている、あたしを友人Aにして、もっともつと酔おうとしている。

かっとなつて、あたしは美樹の手を振りほどいた。びっくりしたような美樹の顔。

「……おめでとう」

叩きつけるように皮肉るように言いたかったのに、じっさいのところあたしの声は、か細い涙声だった。

背を向け、駆け出す。嫌だった。すつごく、嫌だった。一刻も早く、美樹から、絵に描いたような幸福から逃げたかった。

長すぎる袖が、ひらひらと揺れる。美樹の言葉を思い出す、そしてまたあたしはくつくつと煮えるような怒りを感じる。適当なこと言つて、褒めとけばあたしが喜ぶって思ってるんだ。

美樹はこのことを、大山くんに言うのだろうきつと。そして慰めてもらうのだろう。もしかしたら、いっしょに帰るのだってなしになるのかもしれない。美樹は、大山くんと帰るようになるのかもしれない。

ひどい。

あたしの呟きは、風にさらわれてゆく。

美樹の、すらりとした両手足が思い浮かぶ。大山くんは、美樹のあの手足もやつぱり好きだろうか。そう思うと、その想像の生々しさにぞつとした。

苦しくなり、あたしは走るのをやめて歩く。激しく呼吸しながら、涙が滲むのを抑えられなかった。

袖にほとんどが隠れた両手を、あたしはじつと見る。そして思う。

あたしはきつとこの手を出すことなどないのに。

後ろを振り向く。美樹の姿は、なかった。べつの道から帰ったの

かもしれない。涙がついに溢れ出し、惨めだ、とあたりは思った。

猫にお手

お題：「早朝の階段」「嘘をつく」「猫」

午前七時半。学校にはまだ、人気がない。喧騒の代わりに、しんとした光が満ち満ちているだけだ。屋上の花の手入れをしに来た俺と志乃さんは、今朝は屋上が開いてないことに気がついた。鍵をとるうえにも、職員室も開いてない。そこで俺たちは、屋上へとつながる階段に座って時間を潰している。

「佐藤先輩。その傷、どうしたんですか？」

ふいに、志乃さんが聞いてきた。あー、と俺は曖昧な声を出して、両手を眺める。そこにはざっくりとした引つかき傷がある、隠すために包帯でも巻いてこようかと一瞬悩んだのだが、それはそれで大げさだろうとあえてこのままで来た。

昨日は姉と出くわしてしまって、それでやられたのだ。全身で暴れる姉を思い出し、俺はため息をつきたい気分になる。しかし今の俺がじっさいにつくのは、嘘だ。

「猫ですよ。猫に引つかかれたんです、撫でていたら、どうやら嫌われてしまったらしくてですね」

志乃さんは、俺を睨むようにうかがい見る。そしてひとこと、突きつけるように言った。

「……やっぱり嘘つきですね」

「は、なにがです？」

俺はとぼける。志乃さんの鋭い眼光が痛い。

志乃さんは、知っているのだ。そのことを、俺はもう感づいている。姉と志乃さんのあいだにはなんらかのつながりがあると、俺は昨日も姉にほめかされた。でも、言わない。まだ言わない。時は来ていない。それを認めることで、それを事実にしてしまっ

けない。今は、まだ。

志乃さんは、ひとりごとのように言う。

「……猫、ですか。佐藤先輩って、猫に似てるって言われませんか？」

こんなにも唐突な話の転換にも、俺は平然とした顔でついてゆく。

「いやいや光栄ですねえ、それは俺が猫みたくそばに置いておきたい存在であるということでしょうか、あるいは猫みたくペットとして飼いたいということでしょうか！」

「違います」

志乃さんに一蹴されて、ですよー、と俺は笑う。最近軽蔑されるのが快感になりつつある、これは変態ロードまっしぐらかと危惧しつつも、まあ志乃さんならいいかという結論に結局は落ち着く。もうこの時点でわりとおかしくなっていることは、もちろん自覚している。だって俺は本来、絶対的に他者の上に立つことのできる存在であるはずだからだ。

志乃さんは長い髪をくるくるといじりながら、続ける。

「猫みたいに、掴みどころがないって意味ですよ。なんだかいつも、涼しい顔してて」

「涼しい顔してるのは、どちらかと言うと志乃さんのほうじゃないですか？」

「私はいつだって、寒いくらいに涼しいので」

俺は苦笑する。つくづく強がりな人だ。

「……いやまあ言われてみれば、確かにそうかもしれませんね。俺、感情的になったりしないですし」

「そうですよね。さぞかし無機質な人と思われてるでしょうね」

「いやいやなにをおっしゃりますか志乃さん、俺はとっても有機質な人間ですよ！」

「そうやってまた、本質を掴ませないんですね」

はは、と俺は再び笑うしかない。

志乃さんの言う通りなのだ、きっと。俺はいつでも飄々としているし、本音を決して人に言わない。そうあるように意識しているし、努力もしている。しかしまあその成果が猫とは、ずいぶん俺も可愛らしくなったものだ。

すこしの間があつて、志乃さんは言う。

「なんなら猫耳でもつけますか」

「そしたら志乃さんが俺のこと飼ってくれるんですか」

「なにを言ってるか、自分でわかってますか」

「すみません、ノリです」

「……猫つて言ったの、褒めてませんよ。私、動物嫌いですし」

「それは今流行りのツンデレだと解釈してもよろしいでしょうか。だとしたら萌えですね。ツンデレ志乃さんにきゅんきゅんですね」

「もう一度言います。なにを言ってるか、自分でわかってますか」
「すみません、ノリです」

志乃さんはあきれた顔をする。この毛虫でも見るような視線、痺れる。

志乃さんは、なんの前触れもなく言った。

「佐藤先輩。そろそろ、嘘をつくのもやめにしませんか」

つくづく直球な人だ、と思う。そして不器用。いつだって全力で、まっすぐな言葉を投げってくる。

しかし俺は、とぼける。なおも。

「いやいや嘘じゃないですよ、志乃さんにときめくことの、いったいどこが嘘でしょう！　一センチの隙間もなくほんとうですよ、この気持ちは！」

「一ミリの隙間はあるかもしれないですね」

なんてうがった見方をする人だ。

「いえいえそういう意味でなくしてですねえ志乃さん、つまりして俺はこの気持ちが誠実だと言いたかったのですよ。これは、ほんとうです」

俺は思う。正直になにもかもを言うのが誠実だって信じてるやつ

は、いつぺん痛い目に遭えばいい。ほんとうのことというのは往々にして残酷なものだ、それを無理やりに知らせることに、いったい価値などあるものか。それは自己満足に過ぎない。話して自分の荷を降ろしたいだけなのだ。痛みに耐えられないからって言ってしまうなんて、それは愚の骨頂だ。

誠実というのは、相手を傷つけないということではないか。相手をできる限り、不用意な痛みから守るということではないか。だから俺は、時が来るまで言うつもりはない。それまでは、あくまでも沈黙を守り通す。

志乃さんは、納得できないといった表情をしている。だから俺は、言い聞かせるように言う。

「志乃さん、まあ確かに俺は、猫に似たところが多少あるのかもしれないです。でもだとしても俺は恩を忘れない猫です、そんじよこれらの猫とは違う。ちゃんと首輪の鈴も鳴ってますし」

「……少々倒錯的である発言な気がしますが」

「いやまあ確かにそうですね、どうも変態で申し訳ありません」

「いまさらなんで、いいです」

志乃さんはそう言って、視線を俯ける。考えごとをしているときの、志乃さんのくせだ。俺はただ、じっと待つ。志乃さんの考えがまとまるのを。

階下に人の気配が響き始めたころ、志乃さんはふいに向き直り、言った。

「お手」

差し出された手に、は、と俺は思わず困惑の声を漏らしてしまった。志乃さんの表情は、真剣そのものだ。いつそ切羽詰っていると、言ってもいいくらいに。

「ええと志乃さん、客観的かつ一般的な意見を述べますと、お手というのは犬にやるものだと思いますがねえ」

「猫なんですよね？」

志乃さんは手を出したまま、俺を上目遣いで睨むようにしながら

言う。

「猫なんですよ、でも、ほかの猫とは違うんですよ。だとしてそれを証明してください、猫はお手なんてできませんから」

まったく滅茶苦茶な思考回路をもった人だ。ちなみにこれは、褒めている。

「……志乃さん、あなたもたいがい倒錯的である気がします」

「はやく」

促されて、俺は志乃さんの手を見る。ほんとに小さいよなあ、と俺は感慨深く思う。

俺は志乃さんをつかがい見る。志乃さんは唇を結び、まっすぐに俺を見ている。これは本気だな。

拒否する理由も権利もない。俺は志乃さんに、忠誠を誓っているのだから。

俺はそつと、その手のひらに手を乗せる。こうすると違いがよくわかる、志乃さんの手はほんとうに白くてきゃしゃだ。そしてあたたかい、信じられないほどにぬくもっている。

「よし」

満足そうに言って、志乃さんは微笑んだ。女王の微笑み、と俺は思う。そしてどうしようもないくらいに、ぞくぞくとしてしまう。

志乃さんはふいに手をほどいて立ち上がり、俺を見下ろして言った。

「職員室、見てきます。もう鍵もらえるかもしれないし。いい子で待っていてください」

俺が返事をするのを待たずに、志乃さんはくりと背を向けぱたと階段を下りてゆく。その足音を聴きながら思う、志乃さん、ずいぶんと愉しんでるな。いやまあいいんだけど、俺もちよつと愉しいし。

俺は手の甲をじいつと見る。赤く刻まれた傷。そんなに痛むわけでもない、軽い切り傷だ。しかし、この傷には、それ以上の意味がある。そして志乃さんは、それに気づきつつある。

光のなかで、ちりが舞う。学校の喧騒は、はるか遠くから響いてくる。

俺は志乃さんに誠実でいよう。最後まで。

ぬくもりの余韻を両手に感じながら、俺は改めてそう思った。

心の味は甘かった

お題：「朝の玄関」「約束を破る」「飴」

僕はもしかして、馬鹿なのかもしれない。それも、救いようないたぐいの馬鹿。

馬鹿っていうのは、頭が悪いとか、ましてや勉強ができないとか、そういうことを言っているのではない。自分で言うのもなんだけど、僕はずいぶん頭の回転が速いし、いまから中学校のテキストに手を出してしまうくらいには勉強ができる。

そういうことじゃなくて、馬鹿っていうのは、僕はどうしてもなく、愚かなんじゃないかってふと思ったんだ。

いまはいつたい何時なんだろう、わかんないけど、鳥が鳴きはじめ空気は白みはじめている。夜明けた。僕は玄関で正座をしている。夜の十時からずっとだから、すくなくとも、七、八時間はこうしていることになるだろう。足は鈍く痛み、頭は疲れて重たい。でも僕は、正座を止めないし居眠りすることもない。背すじを可能な限りに伸ばして、彼女の帰りを待つのみだ。

きのうの夜も、舞ちゃんは急に出かけてしまった。ちゃんとお留守番してるのよ、と言われて、うん、と僕はうつむくしかなかった。それが僕にできる、数すくない抵抗のひとつだった。だって寂しいから行かないでなんて、そんなこと言えるほど子どもじゃないし。

そんな僕を見て、舞ちゃんはくすつと笑った。

「寂しいの？」

どうして舞ちゃんは、僕の気持ちがわかるのだろう。でも僕は、なにも言わない。拳をかたく握り締めて、ぎゅつと沈黙している。

「そーうねえ……」

玄関で靴を履きながら、舞ちゃんはなにか楽しいことを考えてい

るみたいだった。僕は舞ちゃんの靴を、見つめる。踵の高い、ピンヒール。派手なピンク色のそれは、とても攻撃的だ。

そして、ふと思いついたかのように言った。

「じゃあさ、智くん」

僕は顔を上げる。なるべく顔に期待の色を滲ませないよう気をつけながら。

舞ちゃんはしゃがみ込み、僕の頭を撫でながら言う。

「約束しよう。お姉ちゃんのこと、ここで待っててよ。そうね、正座して待っててね。崩しちゃ駄目だよ、ずっと正座してるんだよね、お姉ちゃんのこと好きなら、それくらいできるよね？」

僕はうなずく、繰り返しうなずく。舞ちゃんのためならそのくらいできるよって、僕の強さを示すために。

舞ちゃんは満足そうに笑うと、続けた。

「うん、いい子。じゃあ、お姉ちゃんのこと待っててね。正座して待っててね？ 帰ってきたら、そのときは、」

舞ちゃんは、優しく笑う。

「遊園地、行こう」

僕はすっかり嬉しくなってしまうと、うん、と言った声は弾んでしまっていた。

そして舞ちゃんは、出て行った。僕はぺたんと座り込み、正座して、そのまま夜中を、過ごしたのだ。

あくびを噛みころす。眠ってはいけない、眠そうにしては、いけない。僕は、図書室で読んだ聖書の一節を思い出す。

——目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたにはわからないからである。

つまり、そういうことだ。

ほんとのことを言えば、僕だって、こんなのおかしいと思う。わかってる。でも僕は、舞ちゃんのためなんなんでもする。それがたとえ、愚かだとしても、馬鹿だとしても、僕は。

だから僕は、待つ。灰色のドアノブをじっと見据えて、ひととき

も、心を休めないで。

すっかりあたりの空気が清潔になりはじめたころ、ドアががちゃりと開いた。僕ははっとして、ますます背すじをぴんと伸ばす。

舞ちゃんは、疲れていた。まとう空気でわかる。舞ちゃんのまわりの空気は、重たくって、ごちゃごちゃしていて、気だるい。

舞ちゃんは後ろ手にドアを閉めると、僕をしずかに睨みつけた。

「なに？ あんた、ほんとに待ってたの？」

僕はなにも言わず、舞ちゃんの目をじっと見る。それが、僕の答えだった。

舞ちゃんは、軽蔑するように僕を見た。そして言う。

「馬鹿じゃないの」

そうだよ。僕は、心のなかで言う。そうだよ、舞ちゃん、きつと僕は、馬鹿なんだよ。舞ちゃんとの、楽しいいちにちが欲しいって、かつてみたいに笑いあえるんじゃないかって、それだけを信じて、信じ続けて、こうして待っているんだよ。

舞ちゃんは、ため息をついた。深く湿った、ため息。

「遊園地なんか行かないわよ」

その言葉は僕の心のいちばん柔らかいところに突き刺さり、痛みに耐え切れず僕はうつむく。心臓が、ときどきとるさく暴れはじめる。

舞ちゃんは、靴を脱ぐ。履いてる黒いストッキングまでもが、ぐったりと疲労している。

と、ぽとんと、膝に小さな袋が落ちてきた。

飴、だった。袋に詰められた、安っぽくて小さなキャンディ。

「それ、あげる。よかったわね、感謝しなさい」

それだけ言うと、舞ちゃんは早足で自分の部屋に行ってしまった。僕は、ぎゅっと飴の袋を握り締める。くしゃ々と音が鳴る、それは、まるで僕の心がきしむ音のようだった。もう一度、くしゃくしゃと鳴らす。くしゃ々と、くしゃくしゃと、そう、これは、こ

のぐちゃぐちゃの袋はきつと僕の心の包み紙なんだ。

涙なんか、流れてこない。涙を流すことすらできない。

僕は正座したまま、キャンディの袋をそつと開けた。

なかには、ハートのかたちをしたピンク色のキャンディが入っていた。

「……僕の心は、こんなに可愛らしくない」

呟いて、でも僕は、それを口のなかに押し込む。

感傷的な、甘みが滲んだ。

僕はゆつくりと立ち上がる。足がしびれてよろけてもつれる、でも、立ち上がらなければいけない。朝だ。僕は、学校に行かなきゃいけないのだ。生活をしなきゃいけないのだ。僕が僕であるために、いや、僕が人間であるために。

僕はきょう、いちにちやっていけるだろう。甘い甘いこの味を、僕の心の味を舞ちゃんに教えてもらえたのだから。

小さな心を口のなかで溶かしながら、馬鹿な僕のいちにちは再びはじまる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747r/>

世界の話の三題噺

2011年10月9日03時26分発行